

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と 『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点

長谷川明紀

〈要旨〉 醍醐寺蔵『諸経中陀羅尼集』の最初に掲載されている法華経陀羅尼と『法華経山家本』の法華経陀羅尼は、慈覚大師点本に由来するとされているので、両本における漢字加点が比較検討された。

仮名、声点に加えて、ダッシュ (-) 印が醍醐寺本における加点に含まれる。このダッシュ印は、悉曇文字一字が漢字二文字を用いて音訳される場合、この漢字間に導入されていると結論された。

陀羅尼では、上声および去声の声点は、悉曇字に従ってそれぞれ短音および長音を識別する記号として代用されることが知られている。これら両本での声点を比較して、『法華経山家本』の声点の幾つかは時代の経過につれて変化しているものの、両本は慈覚大師を源流とする事を示す多くの共通した特徴をもつことが明らかにされた。

〈キーワード〉 『諸経中陀羅尼集』、醍醐寺、『法華経山家本』、陀羅尼、加点

1 はじめに

法華経は日本で最も広く用いられる仏典といわれる。筆者は、江戸後期の学僧真阿宗淵上人開板による『法華経山家本』の読みは、意味・漢文法に従うが、読誦効果を高める工夫もなされていることを、近著で明らかにした⁽¹⁾。また、

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

法華経には六種の陀羅尼が登場するが、その読みを真阿宗淵上人撰『法華経陀羅尼』（梵漢両字・考異付）にある悉曇字と漢字の仮名音とを比較して、考察した。この過程で、故沼本克明氏からご指導と貴重な資料のご提供を得た。

国語史の分野では、慈覚大師音とされる法華経陀羅尼が既に知られている。これは、昭和46年8月の醍醐寺総合調査で築島裕氏が調査された、醍醐寺蔵の『諸経中陀羅尼集』一巻（第393函第63号）の最初に記載されているものである。この書については築島氏の論文⁽²⁾に詳しいので詳述は控えるが、長文の識語でその由緒来歴が明らかであることから、これは慈覚大師（794～864）の音による法華経陀羅尼と認められている。

沼本克明氏は、『諸経中陀羅尼集』の慈覚大師円仁と他の三家による陀羅尼の読音を報告され⁽³⁾、円仁の読みとするものは、他の三家と比較すると、①原梵語音の形を保存している場合が多い、②濁点は使用されていないが濁音字母で注音されている、③拗音字が使用されている、等が古い平安初期の（円仁時代の）加点様式を反映している証拠であろうとし、また、④二重母音を新しい母音消去法で読んでいると、7個の具体例を挙げて言及された。『法華経山家本』ではこのうち3例が、沼本氏の指摘と一致する。

なお、『諸経中陀羅尼集』の慈覚大師陀羅尼（以下『醍醐寺本』と略記）には、声点による濁音表記はなく、読音の片仮名や音注が加点されているが、仮名のないものも多くある。これ等を南天音で如何に読むかは、難しい問題である。

『法華経山家本』（『山家本』と略記）は慈覚大師点本が正用されたとあるので、『醍醐寺本』『山家本』は共に慈覚大師点本を原本するとされている。この『山家本』の陀羅尼は全ての漢字に読音があるので、『醍醐寺本』の読みを補完しようと期待される。

沼本氏は、『醍醐寺本』を含む11種の資料から薬王菩薩陀羅尼を集めて、その陀羅尼音訳漢字とその声点を再現された⁽⁴⁾。これは、陀羅尼の声点に重点が置かれたという点で重要であり、沼本氏は次のように述べられている。

声点が上声と去声のみの段階—梵語原音に忠実な読誦法を保つ段階—具体的な加点資料は見いだせないが法華経陀羅尼集の円仁の読誦法が該当する。彼の後の展開は不明であるが、高野山龍光院の明算点、天台宗西教

『諸經中陀羅尼集』（醍醐寺藏）と『法華經山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

寺本には、その残影が見られ、天台宗のみならず真言宗にもこの正当な読み方は引き継がれていたと見られる。

ところが、院政後期から鎌倉初期にかけては漢訳陀羅尼による読み方や宗派による読み方が錯綜して被さっていると思しく、加点が重なっている。

本邦における当初の陀羅尼の声点は、長音を去声に短音を上声にする長短音の区別表記であったが、時代が下るにつれ、漢字の四声点用法に移行する。これに着目すると、全体字数に対する上声字数の比率が低下すると期待される。そこで、沼本氏の代表的な三本および『山家本』のもととなった『法華經陀羅尼』の薬王菩薩陀羅尼の上声比率（上声字数／全字数（159））を比較した。その結果は、「慈覚大師円仁点」（91.8%）>『法華經陀羅尼』（83.6%）>『西教寺本』（73.6%）>『高野山龍光院の明算点』（66.7%）となり、『法華經陀羅尼』は『明算点』、『西教寺本』よりも漢字の四声点用法への統合は進んではいなく、醍醐寺の「慈覚大師円仁の点」に近いと結論された⁽⁵⁾。

こうして拙著刊行までは、慈覚大師円仁の正当な読誦法は『西教寺本』に最もその残影が見られるとされていたが、拙著で『法華經山家本』とそのもとになった『法華經陀羅尼』がより「慈覚大師円仁点」に近いことを明らかにすることができた。これに対して、沼本氏から「漢字の声点は、慈覚大師の点として伝えられる資料に共通して、上声点を基調として去声が多々混じっているのは、古い正しい姿を良く伝えていると見て良いと思います。他の法華經陀羅尼の読み方が、正当な陀羅尼の学問が失われた時代の訛った姿らしいのと異なり、一千年以上を経てほぼ正しく伝承されていることは驚嘆すべきことだと思います。」とのご芳書を執筆中に賜わり、拙著 p.186 に紹介した⁽¹⁾。

また、沼本氏は『醍醐寺本』の薬王菩薩陀羅尼に於ける去声の13字全ての音を、長音相当：7字、長音：2字、複母音：4字と分析され、本邦初期悉曇学に於ける正当な陀羅尼の音読においては、梵語の長短を上去声点で厳密に区別して読誦することが行われていたと、結論された⁽⁶⁾。これ等の沼本氏の研究により、『醍醐寺本』の読音の解明は学問的にはすべて完結したと言えよう。

しかし、法華經陀羅尼の読誦者にとっては、薬王菩薩のみならず他の五種の陀羅尼についても、その正しい慈覚大師の読みを知ることが切望されるところ

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）である。ところが、築島裕氏、沼本克明氏は、共に既にご逝去になったため、この貴重な資料を手にするのは極めて困難となった。

幸い筆者は、醍醐寺聖教調査団の団員であられる小林芳規氏から醍醐寺様へ御紹介を賜り、平成27年8月の調査時に『醍醐寺本』を披閲・調査させて頂く機会を得た。

本報では、醍醐寺経蔵『諸経中陀羅尼集』の最初にある「慈覚大師円仁点」（『醍醐寺本』）の加点、即ち片仮名による読音と声点などを、醍醐寺様の許可を得てここに掲載し、特に声点に関して『法華経山家本』のそれと比較し、考察する。

II 本研究で扱った資料

本報で取り扱う資料は拙著で紹介しており、ここではそれらの概要を示す。

- 1) 醍醐寺経蔵『諸経中陀羅尼集』の最初に掲載されている「慈覚大師円仁点」（『醍醐寺本』と略記）⁽²⁾ この『諸経中陀羅尼集』は室町期の書写本で、表面には朱筆の仮名等が、裏面には数多くの漢字に対応する悉曇字が加筆されており、裏面の最初に「表朱假名裏梵本私注者之後写人必可除静蔵記」とある。
- 2) 『法華経山家本』（『山家本』と略記）これは伝教大師の真蹟を模刻し、大原寺如来蔵に所蔵された慈覚大師の点本と葛川明王堂所蔵の乾元本法華経の読音を正用して、真阿宗淵上人が天保六年（1835）に開板された、とある⁽¹⁾。
- 3) 『西教寺本法華経』（『西教寺本』）天台真盛宗の総本山西教寺に所蔵される法華経で、平安後期～院政初期の書写加点に係るものと考えられている⁽⁷⁾。
- 4) 『梵漢字法華陀羅尼』真阿宗淵上人開板で、「法華経陀羅尼」「正法華総持」「宇文周闍那窟多別訳」「唐三蔵法師玄奘訳」「成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌」の五部分から成り立っている⁽⁸⁾。1.4.5番目のものに悉曇字があり、4番目を『玄奘本』、5番目を『不空本』と略記する。『不空本』には「唐三蔵沙門大廣智不空訳」とあり、その最後には「右漢字就高麗蔵本抄寫又以別本梵文傍注」とある。
- 5) 『法華経陀羅尼』（梵漢両字・考異付）⁽⁸⁾ 上記4)の「法華経陀羅尼」に考異を付加した真阿宗淵上人開板本である。その「法華経陀羅尼」には漢字と梵字（悉曇字）が併記されており、漢字本は「慈覚大師御點寫之」、梵字本は「保

『諸經中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華經山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川延七年書写の桑門覺蓮本」とあり、両本ともに大原寺如来蔵に所蔵されており、これを忠実に書写したとある。その考異（『考異』と略記）に引用された悉曇SD資料について概説する。

『海雲本』 唐の大興善寺の沙門海雲が梵文の真言六十余首を録出して、咸通五年（864）、わが国の遍明大徳に送ったもの。

『弘本』 弘法大師請来の「梵字妙法蓮華經儀軌」一卷。

『梅本』 梅尾高山寺（梅は梅のあて字）法鼓台所蔵の本で、梵文の左側に正法華經の漢字陀羅尼が付注してある。

『阿抄』 『阿婆縛抄』所蔵の梵文陀羅尼で、右側に漢字を対註している。

『承安本』 承安四年（1174）座禪院僧都所伝の梵文で、左側に漢字を対註。

『豊本』 豊山長谷寺の法印、淨因の所蔵。

『一本』 飲光比丘が諸訳互註を著作するにあたって校合した一本。

また『考異』には、漢字本に対校した漢字資料16本が挙げられて（省略）、読音に対する詳細な異本考異がなされているが、声点に関する記載は一切見られない。なお、真阿宗淵上人著『法華經裏書』には数種の資料からの声点の僅かに記載されているが、その『海龍本』『淡本』の声点は陀羅尼音の本来の長短音の表記とは程遠い。

6) 他の悉曇SD資料

『高本』 沼本氏の著書にある高山寺蔵本⁽³⁾。5)の『梅本』とは異なる。

『観智儀軌』 不空訳の「成就妙法蓮華經王瑜伽観智儀軌」中のもので、上述の『不空本』と同一と考えられるが、悉曇字で多少相違が見られ、不空訳漢字との一致は『不空本』よりもよい。秋山学氏のローマナイズ⁽⁹⁾を使用した。

7) 梵語DNの法華經

『索引』 法華經のサンスクリット校訂本の索引、『漢梵 法華經索引』⁽¹⁰⁾。

III 『醍醐寺本』、『山家本』及び『不空本』の法華經陀羅尼における加点

『醍醐寺本』『山家本』『不空本』の法華經陀羅尼の漢字に加点された読音および声点などを、『法華經陀羅尼』の悉曇字と筆者による読みと共に、表1に掲載した。『醍醐寺本』には片仮名で主な読音が漢字の右側に、付随的な音が

『諸経中陀羅尼集』(醍醐寺蔵)と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点(長谷川)

薬王菩薩 (9)					薬王菩薩 (10)					薬王菩薩 (11)					薬王菩薩 (12)					
漢字	醍醐	山家	不悉曇		漢字	醍醐	山家	不悉曇		漢字	醍醐	山家	不悉曇		漢字	醍醐	山家	不悉曇		
隸	上	レイ	上	le	駄	去	ダ	平濁上濁上	ダ	ddha	僧	上	シ	上	so	曼	去	マン	去	man
○29	上	レイ	上	レ	毘	上	ビ	上	vi	伽	上	シ	上濁上	nghe	哆	上	ト	上	ntra	
首	主	シユキヤ	上	śu	吉	上	キ	上	kri	涅	上	シ	上濁上	ni	邏	去	ラ	去	tra	
差	上	シユキヤ	上	kā	利	上	リ	上	ri	○36	上	ク	上濁上	rghe	曼	去	マン	去	man	
○反初	上	シ	上	kṣi	帝	上	テイ	上	ḍi	哆	上	ク	上濁上	sa	邏	去	ラ	去	tra	
30凡	上		上		○32	上		上濁平	dha	邏	上	ク	上濁上	ne	○37	上	マン	去	man	
阿	上	ア	去	a	達	上	ダル	上	rma	夜	上	ハ	上濁上	bhā	多	上	タ	去	ta	
三	上	サム	去	mma	磨	上	マ	上	pa	○37	上	ハ	上濁上	syā	郵	上	ウ	去	ku	
磨	上	サム	去	sa	波	上	ハ	上	ri	樓	上	シ	上濁上	śu	樓	上	ロ	去	ru	
三	上	サム	去	mme	利	上	リ	上	kṣi	○31	上	シ	上濁上	dāhe	哆	上	ト	去	ta	
履	上	ホ	上	bu	差	上	シ	上	te	佛	上	ホ	上		郵	上	ウ	去	ku	

薬王菩薩 (13)					薬王菩薩 (14)					勇施菩薩 (1)					勇施菩薩 (2)				
漢字	醍醐	山家	不悉曇		漢字	醍醐	山家	不悉曇		漢字	醍醐	山家	不悉曇		漢字	醍醐	山家	不悉曇	
樓	上	ロ	上	ru	多	上	ダ	引	ta	座	上	ジ	上濁上	jva	隸	上	レイ	上	le
哆	上	ト	上	ta	治	上	チ	上	ya	反	上	レイ	上	le	5	上	ア	上	a
○38	去	ク	去	kau	41	上	ア	上濁上	a	螺	上	レイ	上	le	阿	上	ア	上	la
橋	上	ク	去	śa	阿	上	ア	上濁上	va	隸	上	レイ	上	le	婆	上	ハ	上	va
舍	上	シヤ	去	śā	盧	上	ロ	上	lo	1	上	マ	上濁上	ma	第	上	テイ	上	te
略	上	リヤ	上	ryah	42	上	ア	上濁上	ā	摩	上	カ	上濁上	ha	○6	上	ニ	上	nre
○反盧	上		上		阿	上	ア	上濁上	ma	座	上	カ	上濁上	jva	涅	上	ニ	上	nre
39進	上	ア	上	a	摩	上	マ	上	nya	隸	上	ラ	上	le	第	上	ニ	上	nre
惡	上	キ	上	kṣa	若	上	ナ	上	na	2	上	ウ	上	u	○7	上	ニ	上	nre
又	上	キ	上	la	○反在	上	ナ	上	ta	郁	上	ケ	上	ke	涅	上	ニ	上	nre
邏	上	キ	上	la	3	上	ナ	上	ta	枳	上	ケ	上	ke	第	上	ニ	上	nre
○40	上	キ	上	a	多	上	タ	上	yā	4	上	ケ	上	ke	多	上	ハ	上	ta
惡	上	キ	上	kṣa	夜	上	ヤ	上	ya	阿	上	ア	上	a	婆	上	ハ	上	va
又	上	キ	上	ya	43	上	ヤ	上	ya						第	上	ハ	上	te
治	上	チ	上	ya											○8	上	ハ	上	te

(仮名、1)の仮名、1は朱筆

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

羅刹女 (3)					羅刹女 (4)					普賢菩薩 (1)					普賢菩薩 (2)					
漢字	醍醐	山家	悉曇		漢字	醍醐	山家	悉曇		漢字	醍醐	山家	悉曇		漢字	醍醐	山家	悉曇		
10 樓	上	上	上	上	醜	去	去	去	去	阿	上	上	上	上	鳩	去	上	上	上	ク
醜	上	上	上	上	16 多	去	去	去	去	檀	上	上	上	上	除	上	上	上	上	śa
11 樓	上	上	上	上	醜	去	去	去	去	地	上	上	上	上	隸	上	上	上	上	le
醜	上	上	上	上	17 兜	サ	サ	サ	サ	○ 反途	上	上	上	上	4 檀	上	上	上	上	da
12 樓	上	上	上	上	醜	サ	サ	サ	サ	1 賣	上	上	上	上	陀	上	上	上	上	nda
醜	上	上	上	上	18 瓮	サ	サ	サ	サ	檀	上	上	上	上	修	上	上	上	上	su
13 樓	上	上	上	上	醜	サ	サ	サ	サ	陀	上	上	上	上	陀	上	上	上	上	dhā
醜	上	上	上	上	19 瓮	サ	サ	サ	サ	婆	上	上	上	上	隸	上	上	上	上	re
14 多	サ	サ	サ	サ	醜	サ	サ	サ	サ	地	上	上	上	上	○ 5	上	上	上	上	su
醜	去	去	去	去	19 瓮	サ	サ	サ	サ	○ 2	上	上	上	上	脩	上	上	上	上	dhā
15 多	サ	サ	サ	サ	醜	サ	サ	サ	サ	帝	上	上	上	上	○ 6	上	上	上	上	re
醜	去	去	去	去	19 瓮	サ	サ	サ	サ	○ 3	上	上	上	上	脩	上	上	上	上	su
					19 瓮	サ	サ	サ	サ	檀	上	上	上	上	陀	上	上	上	上	dhā
					19 瓮	サ	サ	サ	サ	陀	上	上	上	上		上	上	上	上	ra

普賢菩薩 (3)					普賢菩薩 (4)					普賢菩薩 (5)					普賢菩薩 (6)					
漢字	醍醐	山家	悉曇		漢字	醍醐	山家	悉曇		漢字	醍醐	山家	悉曇		漢字	醍醐	山家	悉曇		
婆	上	上	上	上	尼	上	上	上	上	僧	去	去	去	去	14 僧	去	去	去	去	so
底	上	上	上	上	9 薩	上	上	上	上	伽	上	上	上	上	伽	上	上	上	上	ngħa
○ 7	上	上	上	上	婆	上	上	上	上	婆	上	上	上	上	波	上	上	上	上	pa
佛	上	上	上	上	婆	上	上	上	上	履	上	上	上	上	伽	上	上	上	上	ga
駄	上	上	上	上	婆	上	上	上	上	又	上	上	上	上	地	上	上	上	上	ti
波	上	上	上	上	沙	上	上	上	上	尼	上	上	上	上	15 帝	上	上	上	上	tri
羶	上	上	上	上	阿	上	上	上	上	○ 12	上	上	上	上	隸	上	上	上	上	a
祢	上	上	上	上	婆	上	上	上	上	僧	上	上	上	上	○ 阿	上	上	上	上	dhva
○ 8	上	上	上	上	多	上	上	上	上	涅	上	上	上	上	脩	上	上	上	上	so
薩	上	上	上	上	尼	上	上	上	上	伽	上	上	上	上	僧	上	上	上	上	ngħa
婆	上	上	上	上	○ 10	上	上	上	上	陀	上	上	上	上	伽	上	上	上	上	tu
陀	上	上	上	上	修	上	上	上	上	尼	上	上	上	上	伽	上	上	上	上	lyah
羅	上	上	上	上	阿	上	上	上	上	○ 13	上	上	上	上	兜	上	上	上	上	
尼	上	上	上	上	婆	上	上	上	上	阿	上	上	上	上	略	上	上	上	上	
○ 阿	上	上	上	上	多	上	上	上	上	僧	上	上	上	○ 反	上	上	上	上	上	
婆	上	上	上	上	尼	上	上	上	上	祇	上	上	上	遮	上	上	上	上	上	
					○ 11	上	上	上	上											

表 2. 陀羅尼の悉曇字一文字が漢字数文字で表わされるのもの
（但し、薬王「又邏」はその範疇外）

陀羅尼	行	字	漢字	醍醐本	山家本	不空本	悉曇	陀羅尼	行	字	漢字	醍醐本	山家本	不空本	悉曇	
薬王	(10)	3	吉利		キリ上	蘆	キリ	勇施	(4)	2	涅槃		ニレ上	怛	ニリ	
		4	利		リ上	蘆	kri			3	梨		レイ上	唎		nri
薬王	(12)	1	曼		マン去	滿	マン	持國	(2)	7	浮樓	ホ	ホ上	物	ホロ	
		2	哆邏		タラ去	怛囉	タラ			8	樓		ホ上	嚕		pru
		3	邏		ラ去	囉	ntra						ロ上	嚕		
薬王	(12)	4	曼		マン去	滿	マン	普賢	(6)	6	帝隸	チ	チ上	底	チリ	
		5	哆邏		タラ去	怛囉	タラ			7	隸		レイ上	哩		tri
		6	邏		ラ去	囉	ntra						イ上			
薬王	(13)	7	又邏		キカラ上	利	キカラ	普賢	(7)	1	阿羅		ア上	該	アラ	
		8	邏		ラ上	曳	la			2	羅		ア上	当		rte
勇施	(2)	6	涅槃		ニレイ上	怛唎	ニレイ	普賢	(7)	4	波羅		ハ上	鉢	ハラ	
		7	隸		レイ上	唎	nre			5	羅		ラ上	囉		pra
勇施	(2)	9	涅槃		ニレイ上	怛唎	ニレイ	普賢	(7)	14	伽蘭	キラン	キラン上	訖	キラン	
		10	隸		レイ上	唎	nre			15	蘭		ラン上	頼		kra
		16	地		レイ上					16	地		ラン上			チ
勇施	(3)	10	涅槃		ニレイ上	怛唎	ニリ	普賢	(9)	11	吉利	キ	キ上	訖	キリ	
		11	隸		レイ上	唎	nri			12	利		リ上	哩		kri

ることから、「吉利」のみ二字を一拍で詰めて読むとされた⁽¹¹⁾。しかし、漢字数に対して悉曇字数が少ない例は他に 11 個あり、いずれも詰めて読むと拙著で結論した。なお、「吉利」を一拍とした色井師の表現は適切でなく、一拍子と改めた。

沼本克明氏による『醍醐寺本』薬王菩薩陀羅尼の加点の中に、漢字間の「-」が二個の「哆-邏」と「又-邏」に見られた。しかし、「吉利」にはそれは見られない⁽⁴⁾。今回の調査でもそれを確認した。

今回の醍醐寺調査で、六種の陀羅尼で合計 8 箇所（内 1 箇所は後の朱筆による加筆）に「-」が見出せ、薬王「又-邏」を除き、悉曇字一文字が漢字数で表されている場所に加点されていることが判明した。

これ等を表 2 の『醍醐本』の左欄に「-」（表 1, 2 では縦書きのため「|」）で示した。薬王菩薩では、「吉利」と「又邏」は後述することにして、2 個の「哆邏」に「-」加点がある。勇施菩薩には「涅槃」が 3 個「涅槃」が 1 個現れるが、その漢字間の「-」は最初には認められず、二番目には朱線、最後の二個には墨線で記されていた。他は、普賢の「帝-隸」及び「吉-利」である。この最

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

後の「吉 - 利」の悉曇字には、長音（『玄奘本』『不空本』『高本』『観智儀軌』）と短音（『弘本』『豊本』『索引』）の両方がある。

『不空本』には、薬王の「又邏」、「吉利」及び普賢「阿羅帝」以外は漢字二字で表現され、その後に「二合」とある。『不空本』での「二合」の表現は他にもあり、例えば、薬王(4)5「又(キサ)」に対して「乞灑二合」とある。これは「キサ」と詰めて一拍子(*)に読むことを意味する。また、薬王(4)11「耆」には「乞史二合引」とあり、「キシ^{*}」と読み『観智儀軌』の kṣī と一致する。即ち不空は、重子音をもつ悉曇字一文字を漢字一文字で表わすのが難しいとき、漢字二文字を使用し「二合」と加点した。普賢の「吉 - 利」では『不空本』『観智儀軌』共に悉曇は長音(引)であるが、『不空本』では「訖哩二合」とある。なお、薬王の「吉利」は『不空本』では音が異なり、「蘆」lu の一字が当てられている。

これ等から「又 - 邏」の「-」は誤記であり、薬王の「吉利」、勇施の最初の「涅槃」、持國の「浮樓」、普賢の「波羅」、「伽蘭」の各二字漢字に対し一字の悉曇字が対応するものでは、『醍醐寺本』に「-」印が欠落していると言えよう。

普賢「阿羅帝」の『法華経陀羅尼』悉曇字は rte で、「阿」は悉曇第八章で悉曇 r と l の区別のために r の前に加えた発口音で、この悉曇字では「阿羅帝」を一拍子に読むのが基本であろう。しかし、一拍子の読みは現実的でなく、『海雲本』『高本』には a rte とあることから、「アラ テイ」と二拍子に読むのが現実的であろう。なお、『弘本』『梅本』『豊本』には、a ra te とあり、これに従えば「ア^{*}ラ^{*}テイ」の三拍子に読むことになる。但し『玄奘本』『不空本』『索引』にはこれに該当する語句はない。

以上、漢字が数文字で悉曇字が一文字の場合、漢字二字の音を一拍子に詰めて読むと結論出来る。これらに対する拙著での指摘が、ここで実証されたことになる。

V 『醍醐寺本』、『山家本』の声点

法華経陀羅尼には 413 字の漢字が用いられている。『醍醐寺本』では羅刹(4)4「兜」、5「瓮」の 2 字が平声（この存在は今まで指摘されなかった）、38 字が

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

去声、他は上声である。なお、声点が省略されたもの、判読できなかったものも一部ある。一方、『山家本』では、4字が入声、14字が平声、43字が去声、他は上声である。『醍醐寺本』で去声とある38字は、『山家本』では去声20字、平声4字、上声13字、入声1字となっている。この上声に変更された13字の内、悉曇母音（摩多）eをもつものが三例、母音uが五例あり、この変更は後に見る長音相当字への評価の相違によるものである。勇施(1)7「郁」、薬王(3)24、勇施(1)9「目」は、『醍醐寺本』に去声、上声とあるが、『山家本』では入声に変更されている。こうして眺めると、『山家本』は『醍醐寺本』の声点を継承しながらも、長音相当字の扱いに修正を加え、入声を導入し、二点による濁点表記、片仮名への加点、さらには連濁点（薬王(5)1、(5)2の「帝」の連濁点は真阿宗淵上人による）を加えていると言えよう。

『不空本』は、引：26字、去引：3字、入音：1字、去呼：3字、去：6字、上：7字であった。沼本氏は、「梵語短音には漢字上声字が、梵語長音には去声字が宛てられた。適当な上声字、去声字が存在しない場合には平声字で訳し、短音である事を示す「上」注記、長音であることを示す「去」注記が必要になる。」と述べられている⁽⁶⁾。よって『不空本』の長短音は加点だけでは区別することは出来ないが、ここにその加点を掲載した。

平声音の長・短位置付けは容易ではないことから、長音の扱いから始めて、順次検討していくことにする。『山家本』の長音（平・去声）57個は『醍醐寺本』の40個より相当多数であることから、『山家本』には漢字の四声への統合が混入していると、予見される。

これら三本のうち、主として『醍醐寺本』『山家本』の声点を以下に詳細を検討するが、対象とする文字を厳選して、表3に掲載した。この表に『醍醐寺本』『山家本』では主音の仮名と声点を記し、『不空本』の加点、『法華経陀羅尼』の悉曇字、悉曇・梵語資料にある悉曇・梵語のローマナイズ、を記載した。資料名はIIの略名の頭文字を当てた。

1. 悉曇字 e の読み

慈覚大師の孫弟子に当たる安然が、大師請来本を用いて著した『悉曇蔵』⁽¹²⁾

表3. 『醍醐寺本』『山家本』『不空本』の加点、『法華経陀羅尼』および悉曇・梵語資料のローマナイズ

番号	陀羅尼	(行)字	漢字	醍醐	山家	不空	悉曇	悉曇・梵語資料(本名は略字)における悉曇や読音など
1	薬王	(3)1、(5)2	帝	上 テイ	平 テイ		nte	tte:玄、te:不、nte:観、高、索
2	薬王	(3)3	帝	上 テイ	平 テイ		kte	kte:玄、不、高、観、索、ddhe:承
3	薬王	(7)2	祢	上 ネ	去 ネ		ne	ne:高、ni:玄、不、観、索
4	薬王	(7)9	隸	上 レイ	平 レイ		re	ri:豊、不、観、高、索、rī:玄
5	薬王	(10)12	帝	上 テイ	平 テイ		te	te:玄、不、観、高、索、ti:豊
6	羅刹	(3)2,4	醯	上 ケイ	去 ケイ		he	he:不、玄、高、観、索
7	薬王	(1)11	隸	去 レイ	上 レイ		le	le:高、te:不、nte:観、re:豊、tte:玄、索
8	薬王	(2)2	茅	去 テイ	上 テイ		te	te:玄、不、観、高、索、ti:弘
9	薬王	(2)9、(5)1	羶	去 セン	去 セン	引	śe	śā:弘、梅、承、不、観、索、śa:玄、śe:高
10	持國	(1)11	旃	去 セン	去 セン		ce	ca:弘、玄、不、高、観、索
11	羅刹	(3)10、 (4)1,3,5,7	醯	去 ケイ	去 ケイ		he	he:例外なし
12	薬王	(7)11、(11)12	地	去 タイ	平 タイ	引	ddhe	ddhaiタイ(長音):豊、ddhā:弘、玄、ddhe:高、ddho:不、観
13	薬王	(2)4	咩	上 マイ	上 マイ		me	me:玄、不空、観、高、索、mi:弘
14	薬王	(5)9	盧	去 ロ	去 ロ		lo	lo:高、ro:阿、玄、不
15	薬、毘	(14)5、(1)10	盧	上 ロ	上 ロ		lo	lo:高、玄、不、ro:豊
16	羅刹	(1)6	瓮	平 サト	平 サト		sto	「瓮醯」、stu:梅、索、sto:高
17	毘沙	(1)5	瓮	去 ト	上 ト		nu	ḍo:海、dno:阿、no:豊、va:索
18	毘沙	(2)1	拘	去 ク	上 ク		ku	ku:例外なし
19	普賢	(2)1	鳩	去 ク	上 ク		ku	ku:例外なし
20	普賢	(8)5	脩	去 ソ	上 ソ		su	sa:玄、su:不、高、観、なし:索
21	普賢	(8)14	楼	去 ロ	上 ロ		ru	ru:玄、不、観、索、rū:弘、梅、高
22	普賢	(6)11	兜	上 ト	去 ト		tu	tu:例外なし。但し、なし:索
23	持國	(1)8	乾	去 ケン	去 ケン		gem	gam:海、梅、ga:弘、索、gem:高、gā:豊、玄、不、観
24	持國	(2)2	蹬	上 トウ	上 トウ		tam	tam:玄、観、to:一本、tā:豊、tom:高、不、ta:n:索
25	持國	(2)4	常	去 ウ	去 ウ		sam	sam:高、玄、観、索、sa:不、sam:豊
26	普賢	(9)8	辛	去 シン	去 シン		sim	sam:承、玄、不、観、sim:高、索、sa:弘、梅、si:豊
27	薬王	(13)5	略	上 リヤ	上 リヤ		ryah	lyah:海、阿、rya:梅、lya:豊、玄、高、rye:不、lye:観、索
28	普賢	(6)12	略	上 リヤ	上 リヤ		lyah	lya:弘、梅、豊、玄、不、観、rya:承、ryah:高、なし:索
29	普賢	(9)3	略	上 リヤ	上 リヤ	引	lyah	ryah:阿、rya:弘、梅、承、不、lya:豊、玄、lyah:高、lya:観、索
30	薬王	(2)7	多	上 タ	上 タ	引	tā	「多瓊」、tā:例外なし
31	薬王	(4)7	阿	上 ア	上 ア		ā	「阿叉裔」、a:弘、梅、阿、豊、玄、不、高、観、檢索

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

32	薬王	(4)11	者 迦 婆 阿 陀 兜 陀 婆	上	ギン	上	引	kṣī	kṣī:高、玄、不、索、kṣī:観	
33	薬王	(9)3		上	ギン	去	引	kā	ka:阿、kā:玄、不、高、観、索	
34	薬王	(11)7、9		上	ハ	上		bhā	bha:弘、梅、索、bha:海、承、豊、玄、不、	
35	薬王	(14)6		上	ア	去		ā	「阿摩若」、a:梅、阿、玄、不、高、観、索	
36	持國	(1)9	陀 兜 陀 婆	上	ダ	上	引	ddhā	「乾陀利」、ddha:弘、ndhā:豊、玄、不、観、索	
37	羅利	(4)4		平	サ	平		stā	「兜醴」、sto:海、阿本、stu:梅、索、sta:玄、不、観	
38	普賢	(2)7		上	ダ	上	引	dhā	「修陀隸」、dha:玄、不、観、dha:高、索	
39	普賢	(3)10		上	ダ	上	引	dhā	「陀羅尼」、dha:弘、dha:高、玄、不、観、索	
40	普賢	(4)4	橋 瞿	去	ハ	上	去引	bhā	「婆沙」、bhā:高、玄、不、観、なし:索、	
41	薬、普	(13)3、(9)1		去	ケ	去		kau	kau:玄、不、高、索、ko:観(薬王)、kau:観(普賢)	
42	持國	(1)6	上	ケ	上		gau	go:高、gau:玄、不、観、索		
43	薬王	(5)5	陀 羅 駄 摩 多	去	タ	平	引	dha	「陀羅尼」、dhā:弘、梅、豊、玄、観、索、ddha:不、tha:高、海、阿	
44	薬王	(5)6		上	ラン	去		ra	「陀羅尼」、ra:例外なし、ンは音便で挿入(短音のはず)	
45	薬王	(10)1		去	ダ	平		ddha	「佛駄」、ddha:玄、不、高、観、索、ddha:弘、梅、	
46	勇施	(1)3		マ	マ	平		ma	「摩訶」、ma:例外なし、(山家の平は誤り)	
47	持國	(2)1		上	マ	去	引	ma	「摩躋」、ma:高、mā:豊、玄、不、観、索	
48	羅利	(3)9、11(4)2		サ	サ	去		sta	「多醴」、stā:弘、梅、sta:玄、不、高、観、stu:索	
49	薬王	(1)1、2		安 余	上	ア	上		a	音便にてンが加わる。
50	薬王	(2)9、(3)1 (5)1、(5)2			上	ン	上		nye	nye:高、玄、不、観、索、nyi:弘、ni:承、ネイ音:nye:梅
			去	セン	去	引	śe	śā:弘、梅、承、不、観、索、śa:玄、śe:高		
51	薬王	(5)6、7	羅 尼	上	ラン	去		ra	例外なし、音便にてンが加わる。『山家』の去は不適當。	
				上	チ	上		ni	例外なし	
52	薬王	(9)6、7	三 磨	上	サム	去		sa	sam:玄、sa:不、観、索、(薬王(9)8、9「三履」も同、『山家』に去)	
				上	マ	上		mma	ma:弘、梅、豊、玄、不、観	
53	薬、普	(10)7、8 (8)3、4	達 磨	上	ダル	上		dha	考異なし、例外なし	
				上	マ	平		rma	rmma:玄のみ、(但し、普賢(8)4はrmma、て『山家』は上声)	
54	薬王	(11)1、2	僧 伽	上	ン	去		so	sam:弘、梅、阿、豊、玄、不、観、索、so:高	
				上	ギャ	上		ṅghe	gha:弘、梅、阿、豊、不、高、観、索、ghā:承、玄	
55	普賢	(5)1、(5)7 (6)1、10、(7)9	僧 伽	去	ン	去	去呼去呼上	so	sam:弘、梅、玄、不、観、索、sa:阿、豊、so:高	
				上	ギャ	上		ṅgha	ghā:弘、梅、玄、不、ṅgha:豊、高、gha:阿、玄、不、観、索	
56	普賢	(5)14、15	僧 祇	上	シ	上		so	sam:玄、不、観	
			ケイ	上	ゲイ	上		ṅghi	ghi:弘、梅、阿、ghe:玄、不、観、ṅhi:高	

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

五巻には、悉曇諸家の読みが掲載されている。摩多eに関しては、南天音の寶月は翳(上)、北天音の難陀は翳(平正ノ平ノ重ノ如シ)、中天音の宗叡は翳(上)、空海は噎(去)とするとある。また『悉曇蔵』八巻には、宗叡の中天音「アイ」、寶月の南天音「エイ」とあり、短譚字去声声近と記され、上声に加点されている。これから、e音は短音であるが、「アイ」「エイ」の去声に近い声と理解できる。それ故eの読音は、短音であることから上声とするものの、その調子は去声・平声と表記される可能性を内在する。

本文は、『悉曇蔵』引用説では全て短音の上声扱いであるが、慈覚大師円仁の『在唐記』では全て去声（ka字に「以下諸字皆去ニ呼_レ之」）とある。これに加えて、悉曇第一章のkeは通常の（拙寺蔵・大正大蔵経）『悉曇蔵』では上声とあるが、奈良国立博物館蔵『悉曇蔵』では去声とある。沼本氏は、これらの悉曇の問題点を詳細に列挙された上で、例えば「隸(le)」を「長音相当」と表現された⁶⁾。

『法華経陀羅尼』の悉曇字からeを語尾にもつものを抽出したところ80個に達した。その内、『醍醐寺本』『山家本』ともに短音の上声で、南天音「エイ」の音で読まれているものが、薬王(1)6,9「祢」、(4)6,9「裔」、(6)8「剃」など36個ある。『醍醐寺本』に上声とあり、『山家本』で上声でないものが表3の番号1～6の計8個、逆に『山家本』が上声で『醍醐寺本』がそうでないものは、番号7,8及び後述の薬王(5)12「婆」の3個のみである。番号9,10は後に連声の項で考察する。番号7の『醍醐寺本』は、既に沼本氏によりその去声がleの長音相当とされている⁶⁾。ところが『山家本』では上声となっている。7の「隸」leに一致するものが他に10個あり、両本ともに全て上声とある（『醍醐寺本』に加点のない一個は、その直前に上声があり、上声と判断できる）。また、「隸」reは3個あり、『醍醐寺本』では全て上声、『山家本』では番号4の平声を除き上声である（他に「隸」riが2個あるが、省略する）。以上から、『醍醐寺本』での番号7の長音相当は特殊な場合と言えよう。一方、『山家本』では番号1～6で平・去声とあり、これらは音の長短より音の調子を表わす四声と見られ、四声点への統合が始まったことを示すものと言えよう。

羅刹女には「醯」が9個現れるが、番号11の5個は『醍醐寺本』『山家本』

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

ともに去声とある。一方、羅利(3)2,4,6,8では『醍醐寺本』ですべて上声、『山家本』で2,4が去声、6,8が上声とされている。これらの「醜」の悉曇字は全ての悉曇・梵語資料でheとあり、例外はない。また、「醜」は『不空本』では「係」の漢字が用いられ、加点はないが「係」の声調は去声である。こうしてhe「ケイ」の音は、去声に近いことから去声と加点されたもの、短音の扱いで上声に加点されたもの、の両方があると結論できよう。結局、heの長音も「長音相当」とするとの、沼本氏の表現が適切であろう。

『醍醐寺本』に於けるeを語尾にもつ字には、短音の上声と、長音としての去声が混在しており、これが『山家本』に引き継がれ、一部はさらに拡張されている。この拡張は、eの「エイ」の音が去声・平声と見なされ、漢字四声への統合が始まった現れと理解される。このeを去声または平声とするのは『醍醐寺本』12字、『山家本』では18字あるが、両本で上声とある36字に比べると半数以下と少ない。

番号12「地」ddheは両本「タイ」で、『醍醐寺本』は去声、『山家本』は平声、『不空本』は引とあり、いずれも長音である。このeのみを中天音とするのは妥当でなく、『豊本』ddhaiであれば複母音の長音となり、「去・平・引」が理解できる。一方、薬王(5)12「婆」はseとあるが、『山家本』の「サイ」は『豊本』のsai、『醍醐寺本』去声と一致する。しかし、『山家本』では上声とあり、複母音長音aiとは一致しない。

番号13の「咩」はmeとあり、『醍醐寺本』の音、および『山家本』の左音「メイ」と一致する。しかし、真阿宗淵上人の主張である「ミヤ」音の悉曇字は見当たらない。

薬王(1)2,4「尒」の「ニ」をnyeとするのは難しく、『弘本』のnyi、『承安本』のniが「ニ」には適当であろう。

薬王(5)4,(7)3「履」は『醍醐寺本』には「ヒイ」、『山家本』には「ビ」とあり、共に上声である。その音は『法華経陀羅尼』のmeに帰するのは難しく、『豊本』のmiがその悉曇字であると思われる。これらの「履」は17個存在する。

一方、eの音と思われるものにiが用いられたものがある。薬王(6)6「祢」（これは『山家本』で去声）、薬王(7)4「剃」、持國(1)3,5「祢」、勇施(1)8,10

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

「枳」、普賢 (5)15「祇」、勇施 (4)6「底」の「テイ」音、および勇施 (3)10、11「涅隸」、(4)2,3「涅犁」、普賢 (6)6,7「帝隸」である。これらの殆どは『豊本』でeとなっている。

また普賢 (6)9「脩」を拙著では dhva (トバ) と読んだが、『豊本』には tve とあり『山家本』の「トベイ」・上声・短音と一致する。

こうして、『法華経陀羅尼』で e および i を語尾にもつ悉曇字に対する漢字音は、『法華経陀羅尼』より『豊本』の悉曇字とよく一致する。この事実は既に拙著で指摘した⁽⁸⁾。

2. 悉曇字 o の読み

悉曇字 o は、『悉曇蔵』巻第五に、寶月：鷗 (上)、難陀：干 (平)、宗叡：鷗 (上)、空海：汙 (去) とあり、巻第八には、短奥字去声声近、ヲオとある。これから o の字も短音であるが去声に近い「ヲオ」と読まれる。

『法華経陀羅尼』の悉曇文字 o は、13 個現れている。このうち、番号 14 の「盧」lo では『醍醐寺本』『山家本』で去声に読まれている。この『醍醐寺本』の去声に対して沼本氏は長音相当とされている。しかし、15「盧」の lo では両本で上声に読まれている。また、o は「ウ」音で読まれることもあり、薬王 (11)4「瞿」、普賢 (9)5「瓮」がその例である。これらは上声で読まれている。なお、この「瓮」はヌ、do とあるが、番号 16「瓮」では「サト」・「サド」とある。こうして o の音は、「ウ」と「オ (ヲ)」の区別が判然としないと言えよう。

番号 16 の「瓮」は『醍醐寺本』『山家本』共に平声で長音となっている。この悉曇字 sto または stu のいずれも短音であるが、その音が去声に近いため長音相当と理解され、平声とされたのであろう。ここでも『山家本』は『醍醐寺本』の平声を受け継いでいる。この「瓮」と番号 37「兜」は『醍醐寺本』に平声とあり、慈覚大師点で平声が存在することは今まで気付かれていないようである。

「僧伽」「僧祇」の so-ñgh(e,a,i) の 7 個に関しては後の 9. 連声の項で述べる。

この o でも、「僧伽」「僧祇」の 7 個を除く、単純な～o の音は両本で 4 字が上声の短音で、2 字が去・平声の長音である。このことから o の音も、長音

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）相当とされる場合は、短音とされる場合より少ないことが分かる。

3. 悉曇字 u の読み

悉曇字 u は、『悉曇蔵』巻第五に、寶月：烏（上）、難陀：干（上）、宗叡：字（上）、空海：塙（上）とあり、巻第八には、短甌字上声声近、とあり、u は上声で短音である。しかし、既に指摘したとおり、『醍醐寺本』に u を含む悉曇字が去声とされ、『山家本』では上声に修正されたものがある。それらは、番号 17～21 である。これらは 21 (rū とする三本がある) を除き、上声が妥当であろう。一方、22 は『醍醐寺本』で上声とあるが、『山家本』では去声となっている。このいずれも『不空本』に引声の加点はない。

馬淵和夫氏は、u はオよりもヲに近い発音がされ、寶月・慈覚は南天といいながら中天に近いと述べられている⁽¹³⁾。u を母音とするもの（複母音の au の三例を除く）は 32 個あり、その内の 12 個がウ音に、20 個がオ（ヲ）音に読まれている。

u と o の音の類似性から『醍醐寺本』で u を長音相当とされたものが、『山家本』では上声に修正されていると見られる。

4. 悉曇字に空点を持つもの

悉曇字 am は、『悉曇蔵』第五巻に、寶月：暗（上）、難陀：暗（平）、宗叡：暗（上）、空海：闇（去）とあり、第八巻に、短暗字去声声近とある。よって、この音の声点も e や o と同様の事情にある。悉曇第一章の空点字に声点があるものは、東寺蔵『悉曇章』および奈良国立博物館蔵『悉曇蔵』で、去声に加点されている⁽⁶⁾。

『法華経陀羅尼』にある悉曇字で空点 m をもつものは、番号 23～26 の 4 例のみである。このうちの 24 は『醍醐寺本』『山家本』ともに上声とあり、他の 3 例は両本ともに去声とある。24, 25 は空点をウ表記、23, 26 はン表記されている。資料によっては悉曇字に空点のない（これらには次字に n、ñ が続く）ものもあるが、多くは空点をもつ。

番号 24 には tam、tom が多くみられ、『不空本』では tom に「鐙」（去声）

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）が当てられ、梵語の『索引』には ta-ŋ とある。これらは長音相当のはずである。しかしここでも、『醍醐寺本』の上声が『山家本』にそのまま継承されている。

5. 悉曇字に涅槃点をもつもの

悉曇字 ah は、『悉曇蔵』第五巻に、寶月：悪（悪声ハ漢國ニ正舌ニシテ之ヲ呼ガ如）、難陀：阿（入）、宗叡：悪（入 悪字漢音）、空海：悪（入）とあり、第八巻に、長痾（ア）字去声音近悪とある。これより、字音は南天音では長音で去声、中天音では入声とされる。『法華経陀羅尼』の悉曇字に涅槃点 h をもつものは、番号 27～29 の「略」である。29 には『醍醐寺本』の声点は省略されているが、近くの 28 が上声であることから上声と見なされ、これらは両本で全て上声と理解できる。一方、『不空本』では 29 は「引」とある。

これ等の事実は上で挙げた『悉曇蔵』の ah の記述と矛盾すると言えよう。そこで悉曇資料と梵語資料『索引』を調査した。その結果、lya、lye、rya が多く用いられており、これらでは上声で、『醍醐寺本』『山家本』両本の声点と一致する。『不空本』で引声とされる 29 は、その悉曇字は rya となっているが、同系列の『観智儀軌』には lyā とあり、引声である。この引声は梵語資料『索引』のそれと一致する。

これらから『法華経陀羅尼』の悉曇字が『山家本』の陀羅尼と、必ずしも一致しないことが分かる。これは既に、声点を除き、拙著で両者での相関関係が 79.4% と低い値に留まると指摘したことの現れである⁽⁸⁾。

6. 悉曇字長音の引声

悉曇字 ā、ī、ū、ai、au を寶月および宗叡は引声とし、難陀および空海は去声と表現している。なお、難陀は ī に引声ともある。『悉曇蔵』第八巻では、例えば ā では長阿依声長呼とあり、すべて長音であることが分かる。

『法華経陀羅尼』の悉曇字に ū はなく、ā、ī、は 19 種 23 個ある。その内、『不空本』に「引・引去」とある 7 個は引声の長音を意味する。一方、『醍醐寺本』では番号 37 「兜」が平声、40 「婆」が去声、他は上声の短音である。また、『山家本』では 33 「迦」、35 「阿」が去声で、37 「兜」が平声とあり、この 3 個の

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加點（長谷川）

みが長音とされている。

31,35「阿」は、悉曇字資料・梵字資料で引声・長音とするものは少なく、『法華経陀羅尼』の悉曇文字 ā が適切でない可能性が高い。ただし、35は『山家本』では去声とあり、長音と一致する。

番号30の「多」は悉曇・梵語資料の全てに、tāとあり、『不空本』に「引」とある。しかし、『醍醐寺本』『山家本』は上声とある。また、36,39の「陀」は一部の資料を除いて、多くは長音・引声で、『不空本』に「引」とある。しかし、『醍醐寺本』『山家本』は上声とある。こうして見ると、多くの悉曇・梵語資料とは異なる声点が『醍醐寺本』『山家本』に共通して用いられていると言えよう。「陀羅尼」の「陀」は、39で両本に上声とあるが、43では両本で去・平の長音とあり、39の上声は特に疑問が残る。

この他、34のように、悉曇資料で長音・短音の優位性が判断できないものも多い。

次に複母音に進もう。複母音 au は番号 41,42 の 2 種 3 個である。一部の悉曇資料を除いて全て複母音である。しかし、『醍醐寺本』『山家本』では 41 が長音の去声とあるが、42 は短音上声「ク」で『高山寺本』の go に一致する。

複母音 ai の悉曇字は『法華経陀羅尼』には現れていない。しかし、既に検討した番号 12 の 2 個の「地」は、『豊本』の ddhai とすると、『醍醐寺本』『山家本』『不空本』の三本の長音（去、平、引）が一致する。

ここで検討した引声や複合母音の長音字に、『醍醐寺本』『山家本』で共に上声とあるものがあり、両本で共通の読みがなされていることが分かる。

7. 単独の悉曇短音字を『醍醐寺本』、『山家本』で去・平声の長音とするもの

悉曇が単独で短音字であるのに、『醍醐寺本』『山家本』で去・平声の長音とされているものが数多くある。語尾を e、u、o とするものは既に 1.～3. で述べた。これら以外に 13 個ある。この内 43,44 の薬王の「陀羅尼」は、『法華経陀羅尼』では dharani とあるが、一部の資料を除き dhāraṇi である。43 は『醍醐寺本』『山家本』『不空本』とも長音（去・平・引）となっており、この dha が誤りと思われる。44 は『山家本』では、音便による「ン」が挿入されて上

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）
声から去声に変化したものであろう（51 で後に述べる）。一方、39 の普賢「陀羅尼」の悉曇は dhāraṇi とあるが、「陀」は上声で薬王の場合とは異なり、問題があることは既に述べた。また『山家本』では、「陀」は薬王で清、普賢で濁となっている。

二本の長音が一致し、悉曇字が短音とあるものに 45 「佛駄」の「駄」がある。「佛駄」は、普賢 (3) にもあり、ここでは「駄」は両本共に上声で、悉曇字は長音とある。これ等の混乱は「陀羅尼」の「陀」で見たものに類似する。悉曇、梵語資料の多くでは「陀羅尼」は dhāraṇi、「佛駄」は buddha で一致している。

また、46 の「摩訶（大の意）」は『豊本』『玄奘本』『不空本』『観智儀軌』『索引』に mahā とあり、『山家本』の「摩訶」の「平、上声」は共に正しくないであろう。『醍醐寺本』ではこれらに声点を欠く。

さらに、次の悉曇 a に対する「阿」の読み（『醍醐寺本』、『山家本』）に、持國 (1) 「阿伽祢」（上、去）、羅刹 (1) 「阿提履」（上、去）、普賢 (5) 「阿僧祇」（去、去）、普賢 (6) 「阿惰」（なし、去）、普賢 (9) 「阿窣伽地」（去、去）、「辛阿毘」（去、上）があるが、悉曇 a は去声と一致しない。例えば、「阿僧祇（無央数・無数の意）」の「阿」は、梵語の『索引』（経文中）・悉曇資料のすべてで、a は否定の意味をもつ短音である。ところが両本共に去声とある。

48 の「多」は、sta の他に stā、stu があり、stā は長音、stu は長音相当と解される。『不空本』は sta 「薩多二合」（「多」は足偏に多の字を使用）と短音である。『山家本』には去声とあるが、『醍醐寺本』には加点を欠く。

8. 悉曇字が重子音をとるもの

重子音に母音が続く悉曇字は、薬王 (1) 2 「余」の nye から普賢 (9) 11, 12 の「吉利」の kri まで 53 例存在する。これ等のうち、長音（去・平声）とされるものは、母音に起因し、子音が複合したことで長音化するものはない。

普賢 (6) 9 「惰」では、『山家本』には「ト..ヘイ」、『法華経陀羅尼』には「ト..ヘ.イ」と仮名に平声点が付されており、『豊本』の tve の音と一致する。この漢字には短音上声の加点があることから、「惰」を一拍子で読むことは明ら

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）かである。近年『山家本』を常用する天台真盛宗伊勢教区では、「惰」を三拍子に読むなど、仮名声点の理解を誤った読みがなされており⁽¹⁴⁾、拙著でこれを正した。

一方、48「多」のstaが去声、16「瓮」のstoが平声とあるのは、前者は、stā、stuとされ、後者はoを長音相当と理解されたのであろう。これらは「サダー*」「サドー*・サドウ*」と読まれるべきで、「サダ」「サド」⁽¹⁴⁾でないことも、既に拙著で述べた。

9. 悉曇連声の読み

安然撰『悉曇蔵』の悉曇蔵序（第一巻、七頁）に連声の説明がある。これを、浄厳は『悉曇三密鈔』⁽¹⁵⁾で「安然所立也。東寺立二種連聲。一二牀相續二一體不絶也。山門立四種連聲。一第十五章聲。二加他麼多聲。三自音成他聲。四他音属自聲也。」と先ず説明し、山門（台密）の四種には鹿顯、冥密があり、その各々は喉内の聲、舌内の聲、唇内の聲、があるとし、それらの音便、不音便を例示しており、その理解を助けている。

悉曇連声に関連するものが47個存在する。その主なものを49～56に示した。

番号49の「安尔」やそれに続く「曼尔」「摩祢」を、真阿宗淵上人は第十五章連声也としている。この第十五章は鼻音（ṅa、ṅā、ṅa、na、ma）の切り継ぎが関わるもので、47個の連声中最も多い。番号51の「陀羅尼」の「羅」では、音便により「ン」が挿入された第十五章連声音便と理解できる。この51は『山家本』に去声とあるが、番号49や、普賢(3)「羶弥」に見られるように、「ン」の挿入で音の長短は変わらないはずであり、去声は「ラン」の音の四声を示したものであろう。

沼本氏は50「羶帝」の「羶」はśe-nに対応し、長音相当で、反切注が長音に対応するとされた⁽⁶⁾。なお、「羶」の資料にはsāの長音が多い。「帝」はteの音が長音相当として『山家本』では平声とされたのであろう。この「羶」śe-nの類例は、薬王(5)「羶」śe-n（『醍醐寺本』では去声は略されている）、(12)1,4の2個の「曼」ma-n、持國(1)11「旃」ce-ṅで、いずれも両本ともに去声とあり、長音相当で一致する。一方、薬王(6)「便」bhya-n、(7)「晝」tya-n、普賢(1)、(2)

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）の5個の「檀」da-n̄、普賢(7)「蘭」kra-n は、両本とも上声とあり、長音相当の去声とはなっていない。

52の薬王「三磨」は次に続く「三履」や普賢(7)の「三魔」とともに、samma(e)であるが、「三」は『醍醐寺本』薬王の二つが上声とあり、他の去声と異なっている。普賢(7)「三魔」の「三」を「サ」・去声とする『山家本』には疑問が残る。

54と55(5例)の「僧伽(合衆の意)」および56「阿僧祇(無央数の意)」の「僧祇」は、『法華経陀羅尼』では songhe(a·i) である。ところが多くの悉曇資料、梵語資料の『索引』では、saṃgha(ā·i·e) とある。「僧」は『醍醐寺本』では54と56が上声とあるが、『山家本』では56のみ上声とある。

「僧伽」の「僧」の声点は『醍醐寺本』では54と55に不一致があるが、『山家本』では去声に統一されている。「僧」の字の本来の声点は平声であるので、上・去声で「僧」を用いるときには加点が必要になる。『不空本』には54に声点がないので、これは平声であろう。よって、54の「僧」は『山家本』『不空本』とともに長音で一致する。

『醍醐寺本』では、「僧」は54で「シイ」と読まれ、他で読音は略されている。ñ や ṃ は喉内鼻音であることから、「僧」の so-ñ も saṃ も中天音ではウ表記により「ソウ」、南天音ではイ表記で「シイ」と去声で読まれるものと考えられ、沼本氏の筆者へのご指摘でも、「シイ」が適切であろうとされた。また「僧」の so-ñ は、沼本氏の番号50の se-n を長音相当とするに類似しており、また saṃ は4. で見た空点より、共に去声が期待される。これらから、「僧伽」の「僧」は去声で南天音「シイ」の音が正しく、『山家本』で「僧」が「シ」と読まれたのは、喉内鼻音のイ表記の認識が薄れた時代（鎌倉中期以降）の書写である可能性を示唆するものと言えよう（拙著 p.234）⁽¹⁾。

一方、56「僧」は『醍醐寺本』『山家本』『不空本』の三本全てで上声である。

この「僧伽」と「僧祇」の「僧」でも、声点に明らかな不一致が見られる。

こうして悉曇第十五章連声とされる、前接字（他音）が後接字（自音）の重子音の一字を取り込んで去声の音となる場合、長音相当の去声となるものと上声を保つものの両方がある。その両方とも、『醍醐寺本』の声点は一部を除き『山

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川家本）に継承されている。

更に、悉曇連声に類似したものがある。薬王(11)3,4「涅槃」ni rgho は、沼本氏により「涅槃」がni-rに対応し去声であるとされた⁽⁶⁾。この類例は普賢(5)9,10「涅槃」ni rgha で、両例ともに「涅槃」は『醍醐寺本』に去声とある。しかし『山家本』には上声とある。

53「達磨」は薬王(10)及び普賢(8)に現れ、「磨」は前者でrma、後者で第十八孤合章のrmmaとある。両者の音には区別なく、後者mmaは大呼され、『山家本』では前者は平声、後者は上声とある。両「達磨」とも『醍醐寺本』は「磨」にのみ「ルマ」とあり悉曇原音で読んでいるが、『山家本』では「ダルマ」とある。これらはいずれも母音調和式の「ラマ」とはせず、新しい母音消去法で「ルマ」に読んでいる⁽³⁾。この点では『醍醐寺本』と『山家本』の読みは一致する。「達磨」に類似したものは次の多数があり、後接字は全て上声である。これからも『山家本』の薬王の「磨」の平声は誤りであろう。なお、『悉曇三密鈔』では「達磨(dha rma)」は他音属自の連声とあり、「ダツマ」と読んでいる。

『醍醐寺本』の「達磨」の「磨」で見た悉曇原音による読みは、普賢の5個の「薩婆」sa rvaに見られ、「婆」に「ルハ」とある（一個は読みが略されている）。一方、普賢(3)(4)の3個の「婆多」va rttaは「リ」の位置が「婆」と「多」の中間にあり、「多」を「リタ」とすると悉曇原音の読みとなる（薬王(10)6「帝」rteは資料の多くにteとあることから、ここでの検討から除外した）。『醍醐寺本』では両例の最初の「薩」「婆」は上声とある。よって「涅槃」「涅槃」の「涅槃」はni-rで長音相当の去声、「達磨」「薩婆」「婆多」の-rとしない頭文字は上声とあり、沼本説は必要十分条件を全て満たしている。

一方、『山家本』では、これらはdha-r,sa-r,va-rに読みが改められているが、長音相当とはせず、『醍醐寺本』の上声を踏襲しており、沼本説とは一致しない。

VI まとめ

『醍醐寺本』には陀羅尼漢字間に「-」印が加点されたものが8個あり、その内の1個は後の朱筆による加筆である。それらの多くは、筆者が拙著で指摘し

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）

た、表2に示す悉曇字一字が漢字二字で音写された箇所、唐の『不空本』に二字の漢字の後に「二合」と加点されたものに、限定して現れる。これより、『醍醐寺本』の「-」加点はその前後の漢字音を一拍子に詰めて読むための加点であり、薬王の「又-邏」の「-」は不要で、さらには6個の「-」加点の欠落もあると結論された。

次に、『醍醐寺本』『山家本』の陀羅尼漢字に加点された声点を中心に考察した。沼本氏は、『醍醐寺本』の慈覚大師音は、本邦初期悉曇学に於ける正当な陀羅尼の音読で、梵語の長短を上去声点で厳密に区別していたと述べられ、e、o音が去声に近いことから、それらに「長音相当」を導入して『醍醐寺本』の長音・複母音以外の去声の声点を解釈された。本研究で、e、o音の関与する「長音相当」の去声は、短音・上声のものに比べて、『醍醐寺本』ではかなり少なく、e音は『山家本』では表3の番号1～6と増加していることが明らかとなった。この増加は、声点が梵語長短音の区別であった段階^(16, 17)から、平安後期以降の陀羅尼声点が漢字の四声点の用法に統合されていく第二段階⁽¹⁷⁾への移行を反映したものと理解できよう。番号44、51の「羅」の去声も漢字の四声と見なされよう。

第十五章連声の番号50 *še-n*の類例も、去声と上声が両本に一致して存在する。

さらには悉曇・梵語資料からは、24「蹬」、30「多璋」の「多」、36, 39の「陀」、42「瞿」、54の「僧」は去声と、また「阿僧祇」の「阿」は上声と思われるが、『醍醐寺本』の加点には疑問が残る。これらの問題点も、『山家本』に54は訂正されているものの、他はそのまま引き継がれている。

近年、遺伝情報を担う核酸（DNA）中の塩基の特異配列を調べることによって、血縁関係の鑑定がなされている。これに類似した手法で、『醍醐寺本』と『山家本』の声点で問題点が共有されている程度を評価すると、『山家本』と『醍醐寺本』は、その源を同じくすると結論できよう。

『醍醐寺本』には長い識語があり、「慈覚大師の寂後68年を経て大師の法華経の読みは殆ど滅びかけていた。それを惜しみ、承平元年（931）法延阿闍梨が「慈覚大師御点」によって二百余名に伝えた。これが後に数名によって次々

『諸経中陀羅尼集』（醍醐寺蔵）と『法華経山家本』の陀羅尼漢字への加点（長谷川）
転書され、室町時代の延徳3年に書写されて、醍醐寺に所蔵されている」ことが分かる⁽²⁾。この様な伝写の過程で、表2の「又-邏」の「-」の誤記や欠落および声点の問題などが生じたものであろう。

『山家本』や『法華経陀羅尼』は、大原寺如来蔵に所蔵された慈覚大師の点本を正用して開板されたとあるが、それらが慈覚大師点本を源流とすることが、ここで確実視できるに至った。しかし、これらの陀羅尼は慈覚大師の音を引き継ぎながらも、後に入声・平声や、勇施(1)7「郁」、9「目」に入声促音小書き表記「ク」を導入し、「僧」を喉内鼻音イ表記「シイ」から「シ」に読み替え、鼻音を去声に、多音節の響きの語を去声・平声とする漢字四声の用法への統合が始まったと見受けられる。さらには『醍醐寺本』の漢字間に挿入された「-」（これらには一部誤記や欠落が見られた）は、『山家本』では採用されなかったことが判明した。

『西教寺本』は拙著まで最も慈覚大師音を残すとされており、その薬王菩薩陀羅尼の加点は沼本氏により報告されている⁽⁴⁾ので、筆者は当初、表1に『西教寺本』を加えて検討した。その結果、『西教寺本』では、慈覚大師の音の残影が見られるものの、漢字四声点の用法への統合が『山家本』より一層進み、さらには陀羅尼の音訳漢字を漢字自体の音で読む傾向が認められた。

こうして、天台真盛宗の伊勢教区にのみ限定的に使用される『山家本』には、他の法華経本では見られない慈覚大師の正当な陀羅尼音が、概ね正しく継承されていることが判明した。今後その読誦は、声点の正しい理解のもとに行われることが期待される。

筆者の陀羅尼の漢字加点への興味は、広島大学名誉教授沼本克明氏のご研究と氏から賜った御指導によって育てられたものである。氏が急逝された後、『醍醐寺本』の研究が急務であるとの思いを募らせた。幸い、沼本氏ご夫人みさ子氏、鳴門教育大学教授原卓志氏のご高配により、醍醐寺聖教調査団の団員であられる広島大学名誉教授小林芳規氏から醍醐寺様へご紹介を賜り、調査が実現した。調査時には小林氏、広島大学教授佐々木勇氏から御指導を得た。関係諸氏並びに醍醐寺様に衷心より御礼を申し上げる次第である。

引用文献

- (1) 長谷川明紀、『『法華経山家本』にその読誦法を探る』、皇學館大学出版部、2015年。
- (2) 築島裕、「古点本の片仮名の濁音表記について」、『国語研究』、v.33、國学院大学国語研究会、p.37、1972年。
- (3) 沼本克明、『日本漢字音の歴史的研究—體系と表記をめぐって—』、汲古書院、p.755、平成9年。
- (4) 沼本克明、「法華経の陀羅尼の読誦について」、安田女子大学大学院文学研究科紀要、第14集、p.40、平成21年。
- (5) 長谷川明紀、『『法華経山家本』にその読誦法を探る』、皇學館大学出版部、p.175、2015年。
- (6) 沼本克明、「梵字資料の四声点—漢語四声表示機能と梵語長短表示機能—」、平成23年度高山寺典籍文書綜合調査団『研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団（代表者代行 石塚晴通）、p.3、平成24年。
- (7) 沼本克明、『日本漢字音の歴史的研究—體系と表記をめぐって—』、汲古書院、p.88、89、平成9年。
- (8) 長谷川明紀、『『法華経山家本』にその読誦法を探る』、皇學館大学出版部、p.134～188、2015年。
- (9) 秋山学、「慈雲と天台僧たち」—『法華経陀羅尼略解』の位置づけをめぐって—、筑波大学大学院 人文社会科学研究科 文芸・言語専攻 紀要、文藝言語研究、文藝篇62、p.1、2012年。
- (10) 法華経原典研究会編、『漢梵 法華経索引』、靈友会、2003年。
- (11) 色井秀讓、『真阿宗淵上人と山家本法華経』、芝金聲堂、昭和55年。
- (12) 安然、『悉曇藏』八卷、河南四郎右衛門板、寛文十二年（復刻）（西方寺蔵）。
- (13) 馬淵和夫、『悉曇章の研究』、勉誠出版、2006年。
- (14) 「山家本法華経読誦教本」刊行委員会、『山家本法華経読誦教本』、天台真盛宗伊勢教区宗務支所、平成25年。
- (15) 浄厳、『悉曇三密鈔』、大正新脩大藏経テキストデータベース2012版。
- (16) 沼本克明、「濁点の源流を探る—附・半濁点の源流—」、汲古書院、p.90、平成25年。
- (17) 沼本克明、「法華経音義における法華経漢訳陀羅尼字の扱い」、安田女子大学大学院文学研究科紀要、第16集、p.46、平成23年。

The Guiding Notes Added beside the Kanji of Dhāraṇīs in
“*A Collection of Dhāraṇīs in Sutras*” (Stored in Daigo-ji Temple) and
Found in “*The Hokekyo Sangebon*”

Akinori HASEGAWA

Abstract

Since Lotus Sutra dhāraṇīs in the first set of “*A Collection of Dhāraṇīs in Sutras*” stored in Daigo-ji Temple and contained in “*The Hokekyo Sangebon*” are believed to have their origins in a text of Jikaku Daishi (Ennin), the guiding notes added beside the kanji of the dhāraṇīs were compared between these two texts.

In addition to kana and accent marks, dash (–) marks are involved in the guiding notes in the Daigo-ji text. Each of the dash marks was concluded to be introduced between the two kanji into which a single original siddhaṃ script was transliterated.

In dhāraṇīs, the accent marks of *kyōsho* (high pitch) and *kyōsho* (rising pitch) are known to be substituted for the marks distinguishing between short and long sounds, respectively, according to the siddhaṃ scripts. The comparison of the accent marks between the two texts leads us to the conclusion that both texts have many common characteristics suggesting the origin from Jikaku Daishi, while some of the accent marks in “*The Hokekyo Sangebon*” were subject to alteration in the process of time.

Keywords : “*Collection of Dhāraṇīs in Sutras*”, Daigo-ji Temple, “*Hokekyo Sangebon*”, dhāraṇī, guiding notes added beside kanji

